

O15-088

医教連携による小・中学生に対する
「親となるための教育プログラム」
開発(第2報)

是松 聖悟¹⁾、吉川はる奈²⁾、安藤 聡彦²⁾、
細川江利子²⁾、寺蘭さおり²⁾、西尾 尚美²⁾、
関 由起子²⁾、齋藤 千景²⁾

¹⁾ 埼玉医科大学総合医療センター 小児科、

²⁾ 埼玉大学 教育学部

【背景】子育ての悩みは時に虐待につながることもある。そのため、小・中学生を対象にした子育てについて学ぶ、親準備教育、将来の虐待予防となる教育プログラムを開発中である。【目的】小・中学生を対象にした親となるための教育を開発中である。任意の1学年を対象として小学6年生、中学1年生、2年生の3年間で年1回、小児科医による授業を行い、その前後での児童・生徒の意識変化を分析し、このプログラムの短期効果を検証する。【方法】2年目は中学1年生を対象に、テーマは「4歳の子どもが保育園で友人のおもちゃを取る、道路に飛び出そうになるなどの行為がある」とした。授業構成は導入、事例呈示(5分)、生徒各自で考えた対策を記載(5分)、5~6人のグループでの議論(15分)、発表し共有するとともに小児科医によるコメントと解説(15分)、最後に再度各自で考えた対策を記載(5分)とした。【結果】2クラスの69人が授業を受けた。各自で最初に考えた対策は「言い聞かせる」、「叱る」、「我慢できたら報酬を与える」、「外に出られないようにする」などの回答が多かったが、グループ議論後は「理由を聞く、共感する」、「絵などを用いて教える」、「相手の気持ちを考えさせる」、「少しずつできることを増やす」、「活発さを良い方向に向けさせる」、「家庭環境を見直す」など考えに広がりがみられた。授業の感想としては、「親になることが大変だとわかった」、「自分が子育てするビジョンを見ることができた」、「明確な正解がないこともわかった」、「みんなで意見を出し合うといろいろなアイデアがでることがわかった」、「誰にも得意・不得意があるが尊重できそう」、「友人との関係も見直したい」、「大人になるための準備をしていきたい」などの声が寄せられた。【結論】中学1年生にとって、子育てを考える機会となった。親となってから生じうることの疑似体験し、他者と意見交換することで子育てのみならず、人間関係構築の大切さも感じたことが示唆された。このプログラムが虐待予防の新たな戦略となる可能性を示唆した。